

### 【分科会 3】

「一緒にスキルアップ！ーノートテイク・パソコンノートテイク・手話通訳ー」

報告者：早稲田大学 田中啓行

#### 企画趣旨

高等教育機関における聴覚障害学生への情報保障が整えられ、道具の準備・支援者の養成が比較的容易なノートテイクを中心に、パソコンノートテイク、手話通訳など、その手段は近年多様になっている。

このような流れの中で、入門的な講座、講習会は各高等教育機関で行われるようになり、支援の量的な充実は徐々に進んでいる。一方で、聴覚障害学生はよりわかりやすく情報の不足がない情報保障を求め、支援者の側からもスキルアップの機会を求める声が聞かれる。しかし、予算、人材等の面から支援者のスキルアップについては、サークルなどが独自に行うか、さもないと支援者個々の努力に任されている所が多いのではないだろうか。

本分科会では、ノートテイク、パソコンノートテイク、手話通訳の実践を通して、「うまい」と言われるノートテイカーや通訳者の「スキル」について考え、参加者個々の「スキルアップ」を目指した。同時に、各高等教育機関の中で、支援者同士が「一緒にスキルアップ」していけるようにすることも念頭に置いて議論を行った。

参加者が自分一人で練習をする際に、あるいは所属する機関・団体でノートテイカーや手話通訳者の養成、研修に携わる際に活かすことができる「スキルアップ」の方法を共有することが本分科会を行った目的である。

#### 分科会全体の流れ

手書きノートテイク、パソコンノートテイクの単独入力、連係入力（2班）、手話通訳の5班に分かれ、それぞれの方法で模擬講義の通訳をした結果をもとにディスカッションを行った。各グループには、情報保障の利用者、あるいは情報保障の担当者の立場から、それぞれの保障手段について研究してきたアドバイザーの方々に加わっていただき、参加者とともに議論をしていただいた。

まず、司会担当者から、本分科会の流れについて説明を行った後、ウォーミングアップとして、3分程度の講義映像の通訳を行った。ここでは、模擬講義の教員の話し方、話の内容に慣れるとともに、通訳方法の確認をすることも目的とした。情報保障の経験がない参加者には、ここで初歩的な方法を理解してもらい、またパソコンノートテイクの参加者には、普段と違うパソコン、ペアに慣れてもら

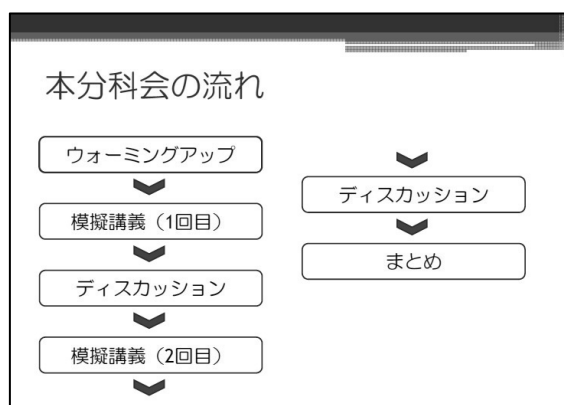


図1 分科会全体の流れ  
(当日資料より引用)



う必要があったからである。

ウォーミングアップ後、10分程度の模擬講義を用いて、1回目の模擬通訳を行った。講義の内容はウォーミングアップの話の続きである。手話通訳については、通訳の様子をビデオ撮影し、ノートテイクについても、良いモデルとなりそうな参加者を1名選び、ノートテイクの過程を撮影した。模擬通訳終了後、ノートテイクをした紙やログ、通訳の映像をもとに、班ごとにディスカッションを行った。ディスカッションの目的は、他の人のノートテイク、手話通訳を見て、取り入れるべきポイントを考え、情報保障において求められている「スキル」、およびそれを習得するための方法について議論することである。そのための目安として、通訳を振り返るためのチェックシートを作成して配布した。1回目のディスカッションを踏まえて、2回目の模擬講義の通訳を行い、「スキルアップ」のポイントを再確認した。最後に、各グループでのディスカッションの内容を報告してもらい、全体で共有した。

## ディスカッションの内容

ここでは、分科会の最後の各班からの報告および分科会終了後のアドバイザーからの報告をもとに、各班のディスカッションの内容について述べる。

手書きノートテイクの班では、「多少字が読みにくくても、情報量を落とさず書くことが大切」ということが挙げられた。要約の程度については、授業内容、利用学生の考え方にもよるので、相談して決めていくという意見が出た。参加者からは、「上手に整理してまとめて書くことに、かなり努力する必要があると感じた」という感想があった。表記についても、「読み手のことを考えるべきだ」という結論になり、



行間や文字間を揃えて書くことが読みやすさにつながるなどの具体的な項目が挙げられた。この班は、3名の利用者が参加しており、利用者の立場からの意見も積極的に出された。模擬通訳をした参加者からは、2回目のほうがうまくできた、同じ内容を他人が書いたものを見るのは初めてで新鮮だったなどの感想があった。

### 【手書きノートテイクグループの意見】

- ・情報を落とさずに書くためには、要約テクニックが必要。
- ・単語の羅列は、時制がわからないため良くない。
- ・ノートテイクの頭の中にある時制のイメージは、紙に書かないと聴覚障害学生に伝わらない。
- ・行間や文字間をあけて書くと読みやすい。
- ・読み手のことを考えて書くことが必要。      など

パソコンノートテイクの単独入力の班は、経験の浅い方が多かったこともあり、個々が小さな部分でも上達したことを感じられるように、アドバイザーが、参加者のモチベーションに焦点を当て、ディスカッションを進めた。1回目のディスカッションでは、「一人ですべての情報保障をしなくてはいけないので、自分でやらなきゃと焦ることで、文章が抜けるところが多かった」という感想が見られた。それを改善するためには気持ちを切り換えて、次に進める気持ちが大事であるということを確認し、一文を落ち着いて打ち、ゆっくり、焦らずということを目標に2回目の模擬講義に臨んだ。2回目の後のディスカッションでは、参加者から「落ち着いてパソコンテイクができた」「文章も最後までしっかり打てた」「話の内容をつかみながらテイクできた」という声があり、“スキルアップ”という目標を達成できたという実感が得られたようである。

単独入力のトレーニング方法としては、自分の基本スキルを身につけることから始め、まずはここまでやりましょう、目標をもってやっていけばいいというアドバイスが為された。また、早く入力できなくても、自分の力を出し切る方法を考えるというアドバイスからは、タイピングスキルがあまりない人や初心者者の技術練習に取り組む際の示唆が得られたのではないだろうか。

#### 【パソコンノートテイク（単独入力）グループの意見】

- ・一人で全ての情報保障を担っていると思うと気持ちが焦り、聞いたことを忘れたり、文章が抜けたりした。
- ・文章が抜けてしまったときは、気持ちを切り替えて前に進むことが大事。
- ・「ゆっくり」「焦らず」を目標にすると、落ち着いて内容をつかんで打つことができる。

など

連係入力の班は希望者が多く、2班編成した。一方の班では「事前にルールを詳細に決めてから取り組むとよい」という議論になった。例えば、先に誰が打ち込むか、聞き取れない時の表記のルール、改行の仕方、文末を体言止めにするかどうか、漢字表記にできなかった時のルールというようなことである。また「ルールを決める際には、利用者にあらかじめ意見を聞いたほうがいい」という意見が出された。初対面同士では、連係の交代のタイミングで情報が抜けてしまうこともあり、連係入力では遠慮は良くないということをディスカッションで確認した。参加者からは、1回目より、2回目のほうが連係での相手の打ち方の癖もつかめて、うまくフォローしやすくなったと思うという感想があった。





もう一方の班でも、相手の入力に割り込むタイミングなど、初めてのペアでの連係の難しさが挙げられた。この班では、技術面だけではなく、イレギュラーな状況でも自分の技術を発揮するためにはどうすればいいかということも議論された。例えば、ペアが何らかのハプニングで間に合わない場合の対応などである。この例に関しては「先に来ている人が出来る限り情報保障をして、遅れてきた人が落ち着いてパソコンノートテイクに入れるようにし、充実した支援ができるようにする」という意見が出ていた。利用学生との交流や意見を聞いたりすることも重要だということも話された。また、「スキルアップだけではなく、情報保障を知らない人に情報提供する機会が大切だ」という指摘もあり、スキルアップを広くとらえた有意義な議論が為されていた。

## 【パソコンノートテイク（連係入力）グループの意見】

- ・連係入力をする前に、連係のルールを詳細に決めておく方が良いのでは。
  - －入力の先攻・後攻。
  - －聞き取れない時の表記のルール。
  - －改行のルール。
    - 事前に利用者の意見（文章の切れ目を把握するために改行が必要、一画面でより多くの情報を取りたいので改行は不要、など）を聞く。 など
- ・非常事態の対応についても考えておく必要があるのでは。
  - －ペアの支援者が遅れて来た場合はどうするか？
  - －開始前の打ち合わせが1分しかない時、優先してペアと確認すべきことは？ など

手話通訳の班については、模擬講義に入る前にアドバイザーから二つのことについて指摘があった。まず、指文字表現を少なくするという事。もう1点は、講師の話の内容をただ表現するのではなく、文章の抑揚も手話で表したり、表現のバリエーションを増やしたりしたほうが良いということである。この班では、参加者が行った通訳に関して、アドバイザーがコメントをしていく形でディスカッションが進んだ。その中で、「学生と通訳者がともにスキルアップできる通訳が望ましい」という指摘があった。大学内の通訳では、利用学生が手話を習い始めたばかりという場合もある。そのような学生からは、手話通訳に対して、より日本語的な表現を要望が出ると思われる。その際に、ただ日本語的な表現で通訳するのではなく、少しずつ手話的な表現を加えていくような形がよいということである。利用学生自身の手話スキルを磨くきっかけになるような、戦略的に高度な手話通訳も、高等教育機関の通訳においては求められる。

参加者からは「今日のようにアドバイザーから意見をいただく機会はなかなかなく、模擬通訳をする機会も貴重なので、様々な場所でこのような企画を設けてほしい」という意見があった。





#### 【手話通訳グループの意見】

- ・講師の話の抑揚も通訳する必要がある。
- ・表現のバリエーションを増やすことが大切。
- ・聴覚障害学生が、通訳を受け始めた当初は日本語対応手話に近い手話通訳を望んだとしても、通訳者が徐々に日本手話の要素を付加していくことによって、学生自身の手話を引き上げ、通訳者自身もスキルアップしていくことが大切なのではないかと。 など

最後のまとめでは、各班の参加者の中で代表を1名選んでもらいディスカッションの内容を発表してもらった。ここでは、基本的スキルを身につけることが必要であること、先生の話し方や抑揚、笑いなども伝える必要があることなどが挙げられた。各班に共通していたのは、利用学生の立場でスキルについて考え、磨いていくことが必要だということである。

#### 到達点と課題

各班のアドバイザー、参加者の声を聞くと、2回目の模擬講義の通訳のほうがよくできたというものが多かった。1回目の模擬講義の通訳に関するディスカッションを踏まえ、2回目には参加者それぞれが課題となるポイントを意識して模擬講義の通訳を行うことで、スキルアップをするという目標は、一定程度達成されたものとする。

また、支援に直接関わる教職員、学生だけでなく、学長レベルの教員や小学校教員など、多様な参加者を得ることができ、いろいろな立場、視点からの意見交換を行うことができた。

利用学生の成長という観点、イレギュラーな状況への対応など、情報保障について考える視点や「スキル」の概念を広くとらえた議論が行われたことで、企画者が想定していた以上に、ディスカッションの内容が豊かになり、本分科会が実りあるものになった。

ただ、より深くディスカッションを行うには時間が足りなかったということは反省すべき点である。独立した企画として、長い時間をとって行うことも検討すべきであろう。今後は、各地域で同様の企画が行われることも望まれる。

手書きノートテイクと手話通訳の班で撮影した通訳過程の映像も、時間的な問題で、ディスカッションで使用するができなかった。通訳した結果の検証も必要なことであるが、それと同時に、通訳過程の分析も重要なことである。手話通訳では、おのずから過程が問題にされるであろうが、手書きノートテイク、パソコンノートテイクにおいても、書き終わった結果ではなく、筆記、入力されている過程で利用学生が読むのだということを踏まえて、通訳過程について議論することが求められる。

今回の分科会の内容を基に、各高等教育機関において、スキルアップの研修が行われるようになれば、本分科会の意義はより深まるといえよう。

**【分科会 4】**

「みんなで解決！現場の悩み 先輩・コーディネーターとともに考える」

報告者：みやぎ DSC 高橋明美

**企画趣旨**

独立行政法人日本学生支援機構が 2008 年に行った調査によると、高等教育機関で学ぶ聴覚・言語障害学生は、1,435 名で、聴覚・言語障害学生の在籍校は 400 校ある。この中で、ノートテイク、手話通訳など授業で支援を行っている学校は 290 校で、支援を受けている障害学生は 902 人、聴覚・言語障害学生支援率は 62.9%となっている。このように聴覚障害者の高等教育機関への進学を背景に、その権利を保障するための情報保障の必要性が認識され、ノートテイクやパソコンノートテイク、手話通訳、音声認識など様々な形での情報保障支援を実施する高等教育機関が増えている。

しかし、実際の情報保障支援現場ではさまざまな課題や問題が起きているのも事実である。そのため聴覚障害学生、支援学生、支援コーディネーターの意見交換や情報交換、それをもとにした工夫、更には授業担当教員の積極的な支援や工夫によって、より良い支援体制を作り出していくことが求められる。

そのため本分科会では、参加者から寄せられた「現場の悩み」について、聴覚障害学生・支援学生・コーディネーターの 3 つのグループに分かれ、それぞれの立場のアドバイザーを迎えてグループディスカッションを行った。この中では、自らの立場で為し得る工夫やなすべき努力について整理するとともに、参加者全員が各自の支援現場で実施できるような具体的な解決策について討論した。

**内容**

まず、参加者同士の自己紹介とウォーミングアップを兼ね、簡単なテーマで短いディスカッションを行ったあと、2 つのテーマについてディスカッションを行った。グループごとに話し合いを行った後、全員で各グループの協議内容を共有し、悩みの解決に向けたアプローチについて意見交換を深めた。

以下、当日の流れとテーマ 1・2 についてのディスカッションの概要を紹介する。

**【分科会の流れ】**

- 10 : 00 主旨説明、講師紹介
- 10 : 05 グループ内ウォーミングアップ・参加者自己紹介
- 10 : 20 ディスカッション テーマ 1「ノートテイクについての要望をどう伝えるか」  
グループディスカッション(20 分)・グループごとの報告 (各 2 分)・  
全体ディスカッション (20 分)
- 11 : 05 ディスカッション テーマ 2「支援学生から先生へ配慮を依頼しても良いか」
- 11 : 50 まとめ

## 【テーマ1】

ここでは、聴覚障害学生から出された以下のような悩み、「ノートテイクから『先輩の聴覚障害学生はノートテイクについていろいろな意見を言ってくれたから、あなたもどこを改善してほしいか言ってほしい』と言われた。でも、どう伝えれば良いかわからない」について、各グループ解決策を協議しその結果を報告し合った。(図1)

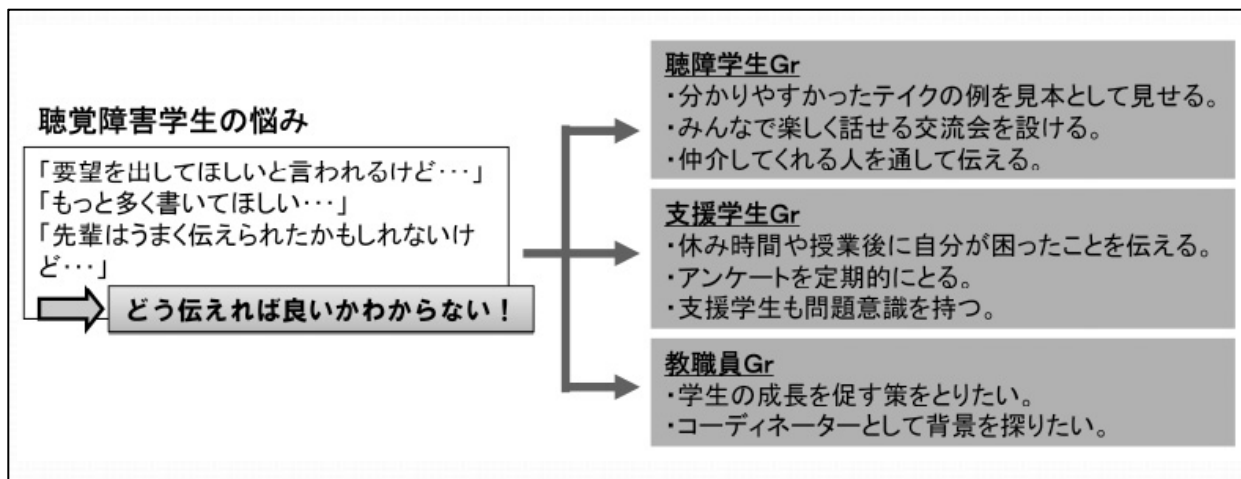


図1 ディスカッションテーマ1とそれに対する各グループの解決策

聴覚障害学生グループからは、具体的なノートテイクの例を提示したり交流会を企画したりするなどコミュニケーションを図る具体的な工夫が挙げられた。

支援学生グループからは、意見を求めるだけでなく自分からの働きかけも必要という見解で、定期的なアンケートや授業後の話し合いを実施するという案が出された。

教職員グループは、提示された悩みの背景には、学生同士の交流が不足している状況があると捉えた。その上で、教職員の立場としては、悩みが生まれた背景を具体的に探り、支援を行ったり利用したりすることを通して学生が成長できるような働きかけがしたいとの意見が提示された。

この中で、聴覚障害学生グループのディスカッションの中では、具体的な解決案が提案される一方で「意見を言うとわがままだと思われる心配がある」との意見も出ていた。これについて参加者からは、「わがままと直接は言われたことはないが、学内の他の聴覚障害学生は何も要望を出さないでいる中、『なぜ君だけ要望があるのか理解できない』と言われたことがある。」との経験も報告された。障害学生支援の必要性が浸透し、より充実した体制を構築しつつある大学がある一方で、こうした実情に向き合っている学生が存在していることを、参加者に強く印象付けた一幕であった。





続く全体ディスカッションでは、事前に募集した悩みの中に、関連する課題が見られた事を紹介した（図2）。

様々な立場から寄せられた悩みを整理してみると、支援学生に意見を求められて戸惑う聴覚障害学生がいる一方で、支援学生は聴覚障害学生のニーズに応えたいとの思いから不安を抱えていることや、何とか交流の場を設けようと努力している教職員が存在することがわかった。これらの悩みが生まれる背景には、日常的なコミュニケーションの不足という共通した課題が隠れていると考えられた。

アドバイザーの宇治川氏からは、この問題意識への一つの回答として、支援学生グループで「聴覚障害学生からの話を待つだけではなく自分たちから歩み寄ろう」「授業の後に一声かけるところから始めよう」との意見が出た事を紹介し、今日出し合った具体的な案を行動に移すことで、これらそれぞれの立場で抱えている悩みの共有や解消に近づいて行けるのではないかとの見解が示された。

## 【テーマ2】

次に、支援学生からの悩み、「授業担当の先生から『何か気をつけることはありますか？』と聞かれた。きちんと希望を伝えるには、全て利用学生に答えてもらうのがいいのか、ノートテイクの自分が感じていることを答えてもいいのか、悩んでしまう。どうすべきでしょうか？」について、各グループ解決策を協議しその結果を報告し合った。（図3）

支援学生グループからは、支援学生自身が答えて良いのかどうかという迷いに共感し、聴覚障害学生と支援学生とで教員に伝えたい内容は異なるので、自分が感じていることは自分から伝えても良いのではないかと、また非常勤の先生などコミュニケーションの機会が限られている場合もあるため、その場ですぐ回答する必要性もあるといった判断が提示された。その一方で、聴覚障害学生と日常的に問題意識を共有していることも欠かせない

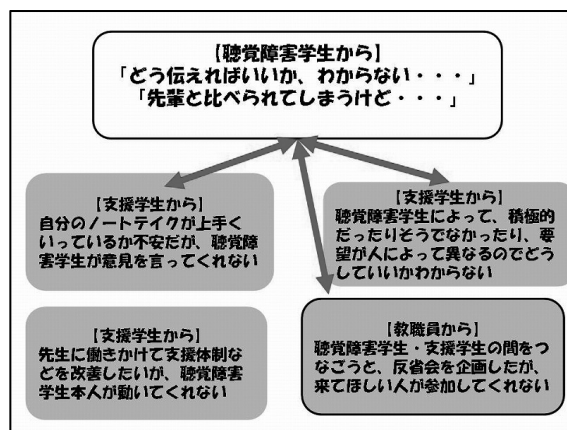


図2 ディスカッションテーマ1の悩みと関連するその他の悩み  
(当日投影スライドより引用)



め学習会や交流会などを企画すること、また報告書の提出などを通し、コーディネーターが窓口となって教員とコミュニケーションを取る体制を整えるなど、多角的なアイデアが出された。

教職員グループからは、教員が支援学生に意見を求めてしまう背景には、教員が学生の状況をきちんと把握できていない状況があると分析した。その上で、大学の事情に適した方法で配慮依頼の文書を作成するなどコーディネーター等が介在して発信する方法や、聴覚障害学生が自分で直接教員に伝えられるような指導も行うべきではないかといった案が提示された。

聴覚障害学生グループからは、教員からの問いかけがあった時には、必ず授業を受けている当事者である聴覚障害学生に伝えてほしいという立場が明確に示された。教員に回答する場合も、それぞれが答えるのではなく、支援学生と聴覚障害学生の意見を確認し、総意として伝えるのがふさわしいという考え方であった。教員とコミュニケーションを取るための具体的な方法としては、「授業に応じた配慮依頼文書を作成して渡す」、「教員との関係づくりも含め自分から直接伝える」、「オフィスアワーに教員を訪問して落ち着いて話合う」等具体例が挙げられた。内容としては教職員グループから挙げられた案と共通するものも多かった。

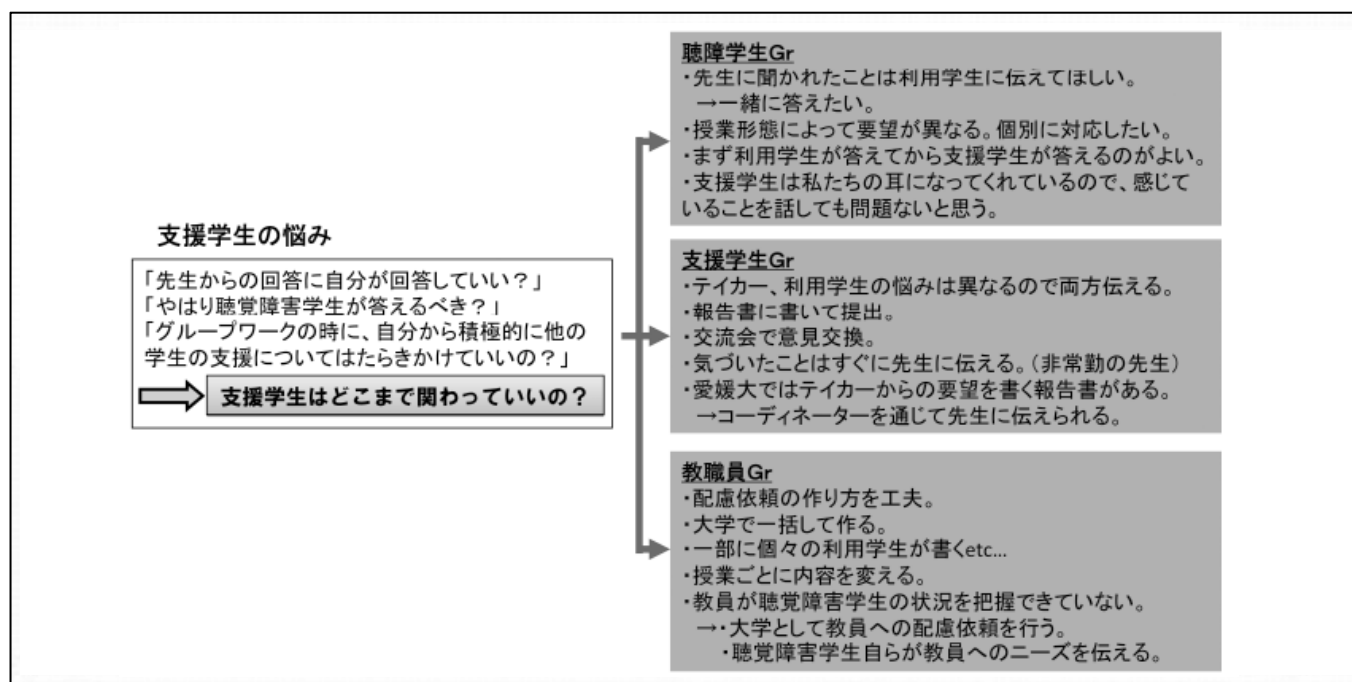


図3 ディスカッションテーマ2とそれに対する各グループの解決案



全体ディスカッションでは、テーマ2で取り上げた悩みと関係深いその他の悩みを紹介した（図4）。ここで、聴覚障害学生も授業の進め方について具体的な意見や要望を提示し得ることや、教員側にも不安や迷いがあること、三者でのコミュニケーションを図りそれぞれが感じている問題を共有していくことが、問題解決のスタートになることが確認された。

参加者からは、聴覚障害学生への配慮が、他の障害のある学生や障害のない学生にとってもメリットとなる場合も少なくないことから、「一部の障害学生のため」ではなく「すべての学生がわかりやすい環境を整える」という視点に立ってサポートを実施していけば良いのではないかとの提案があった。

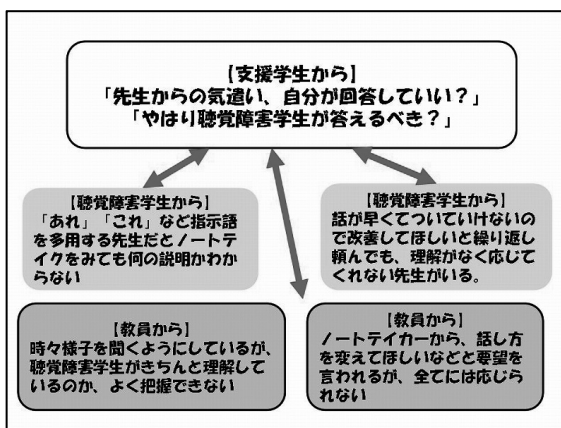


図4 ディスカッションテーマ2の悩みとそれに関連するその他の悩み（当日投影スライドより引用）

## 【アドバイザーからの助言】

### ○福田夕香氏（聴覚障害学生グループ）

自分の学生時代は学内に聴覚障害学生が自分一人しかいなかったため、他大学の聴覚障害学生とは交流して悩みを共有してきた。しかし、支援学生や教職員と情報交換をする場はなかった。こうした機会をもっと設けて、聴覚障害学生が大学生活を十分に楽しんで卒業できるようにがんばってほしい。

### ○管野奈津美氏（聴覚障害学生グループ）

今日改めて、聴覚障害学生、支援学生、教職員の三者の関係を円滑にすることが大切だと実感した。

自分の在籍した芸術専攻には聴覚障害学生が私一人で、入学時には支援の体制もノウハウもなく、先生や支援学生に悩みを訴えることも多かった。そうして4年という時間がかかったものの、学部内に支援体制ができ教員向けの啓発パンフレットを作成するに至った。まずは、仲間を作り何でも話し合う、理解してくれる先生を見つけて相談する。そんな行動が大事だと思う。

### ○白江香澄氏（支援学生グループ）

つい先日、母校の札幌学院大学でバリアフリー委員会設立10周年記念大会があり、後輩たちと意見を交わす中で、課題を解決する知恵や経験は学生自身の中に眠っていると気が付いた。例えば、3年生になってから支援活動を始めた人がいたら、活動に携わった理由は何かを本人に聞いてみる。そういうところに、支援学生を増やしていくための方法があ

るのでは。身近な人の経験をもとに話し合いを重ねていけば、必ず良いアイディアに出会えると思う。

#### ○宇治川雄大氏（支援学生グループ）

今回は貴重な機会なので、ぜひ立場に関係なく、他大学でいい取り組みを自分の大学の支援に生かしてほしい。今はメールですぐに連絡を取り合い情報交換ができる環境がある。学生はもっと自分から動いても良いのではないかな。この時間だけで終わりではなく別の場でも情報交換を続けてほしい。

#### ○河野恵美氏（教職員グループ）

大学というのは、学生が主役の場所。教職員は、「学生は大学生活の中でどういう勉強や経験ができるか」と、陰になり日なたになり、それが学生に伝わらないこともあるかもしれないが、いろいろ考えてくださっていると改めて感じた。

ディスカッションの中で、大変な思いをしている学生さんの発言もあったように、全国には支援室のない大学もちろんある。しかし、きちんと考えてくれる人は身近に必ずいると思う。最初はなかなか見つけられないかもしれないが、学生本人からの発信を、教員も職員も知りたいと思っているし、直接伝えられたことは一番よく解かる。だから学生同士、教職員同士で、話し合うということをたくさんしてほしい。

大学時代の関係は一生ものなので、きっといい経験になると信じている。

#### 【お悩み掲示板】

当日、分科会の会場内に「お悩み掲示板」を設置し、予め参加者から寄せられていた悩みを匿名で掲示して、自由に解決案を記入して情報交換ができるようにした。分科会の開始前や昼休み中にも会場に残り、掲示を見たり実際に解決策を書き込んだりする参加者が数多く見られた。以下に、掲示板の内容の一部を紹介する。（図5）





## 実習や実験など専門的な知識を要する授業のノートテイクは、どう解決しているの？

担当の先生の研究室の学生にお願いするのが良いのでは。研究室の学生なら実験の手伝いをすることもあるし、専門性の面でも安心だと思います。

大学内だけでの解決は難しいと思います。他大学との交流の場を作るなり学生懇談会を利用するなりして、ブラッシュアップする場を設けては？

ノートテイク支援を付けて（実習に）参加したいと依頼しても施設側から断られて依頼の仕様がありません。大学も実習での支援をあまり必要と思っていないようです。どうしたら良いのでしょうか。

図5 お悩み掲示板に寄せられた解決案（一部）

## 到達点と課題

本分科会は、それぞれの立場ごとにグループディスカッション形式で行う初の試みであった。報告内容でもわかるように、聴覚障害学生、支援学生、コーディネーター（教職員）の各グループでは参加者全員が発言し、アドバイザーからの確かなアドバイスを受けることができた。加えて、引き続き行われた全体ディスカッションを通して、立場を超えた観点から問題の共有を図ることができ、それぞれの立場における解決の方策を各大学に持ち帰れるまでに至った。

「お悩み」については、参加者から事前に出していただき、それぞれ異なる立場で共有できるものを選出した。それぞれのお悩みをカテゴリーごとに分けたところ、聴覚障害学生、支援学生、コーディネーター（教職員）の悩みは、意外にも共通していることがわかった。それぞれの立場からの悩みであるにも関わらず、「根っこ」の部分が繋がっていたのである。このことより当初予定していたお悩み3題を2題に変更し、グループディスカッションの時間を多く設け、全体で共有する時間も設けた。しかし、実際にはどのグループも時間で切るには惜しいほど熱い議論で盛り上がっていた。時間配分等は今後の課題として受け止めていきたい。

ここで見えた「根っこ」の1つには、‘お互いを認め合い、ものの言い合える人間関係’があげられる。聴覚障害学生、支援学生両者の信頼関係の構築と、互いに切磋琢磨しながらより良い情報保障を共に作り上げていくこと。コーディネーター（教職員）は、学生同士を上手くつなぎ、成長の手助けを行うこと。これら三者の連携が相乗効果を生むことを

痛感した。グループディスカッションでは、この部分まで掘り下げて話し合われ、方策まで導いたことはとても意義深いものと評価される。そして、それぞれの発表から「支援」を通して学生が悩み、考え、ぶつかり合いながら、人として成長することを改めて考えさせられた。コーディネーター（教職員）は、すべて教育の機会と捉え、学生を伸ばすために、アドバイスやフォローを心がけていることがわかった。

分科会終了後、参加者からは「もっと話したい」「もっと聞きたい」の声を多数いただいた。情報保障に関わる者が一同に会し、問題共有と解決策の模索、他大学の情報交換は必要不可欠なものである。今回の分科会の反省や課題を基に、今後も参加者主体のディスカッションを続けていきたい。



## 【特別企画】

「徹底解剖！PEPNet-Japan—あなたのギモンに答えます—」

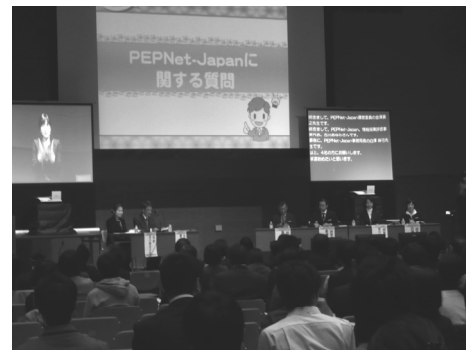
報告者：筑波技術大学 磯田恭子・白澤麻弓

## 企画趣旨

日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムも今年で6回を迎え、年々参加者数が増加してくるとともに、日々の活動を通して多くの方に PEPNet-Japan のことを知ってもらえるようになってきた。その反面、PEPNet-Japan で作成したマテリアルや研修内容を紹介する機会はあっても、組織や活動のことを詳しく説明する機会が少ないことから、活動の実態が分かりにくいという声も聞かれるようになった。

これらの意見を踏まえ、改めて PEPNet-Japan の組織や今後の活動について知ってもらえるよう本企画を開催した。あわせて、PEPNet-Japan によく寄せられる聴覚障害学生支援に関する悩みについてもとりあげ、聴覚障害学生支援の専門家からアドバイスをを行うこととした。

参加者並びに PEPNet-Japan メーリングリスト登録者に対しては、事前に質問を募集し、このうちのいくつかについては当日回答することができた。しかし時間の都合で紹介できなかった質問もあるため、これについても一部本稿内で回答を行いたい。



## 内容

企画の前半は、PEPNet-Japan の組織・活動について紹介し、後半では参加者からの質問に回答した。

本企画の進行は宮城教育大学 菅井裕行氏、同じく及川麻衣子氏によって進められた。回答者として、PEPNet-Japan の運営・事業に関わっている以下の方々に御登壇頂いた。

- ・高橋信雄氏（PEPNet-Japan 運営委員長／愛媛大学）
- ・金澤貴之氏（PEPNet-Japan 運営委員／群馬大学）
- ・吉川あゆみ氏（PEPNet-Japan 情報保障評価事業代表／関東聴覚障害学生サポートセンター）
- ・白澤麻弓氏（PEPNet-Japan 事務局長）

以下に、当日行った質疑の内容を抜粋して報告したい。

### PEPNet-Japan について

Q: PEPNet-Japan とはどのような組織なのか？

高橋・白澤／2004年に立ち上げられた、全国の大学等の高等教育機関で学ぶ聴覚障害学生支援のためのネットワーク。アメリカの PEPNet (Postsecondary Education Programs Network) をモデルとして立ちあげ、それに敬意を称す意味で、名前を借りている。現在は4つの事業(啓発教材作成事業／情報保障評価事業／コーディネーター連携事業／支援技術導入事業)に取り組んでいる。いずれも「今までになかったものを生み出す活動」を行っており、その時々時代のニーズに応じて、教材開発／研修会開催／シンポジウム開催／諸外国視察等を実施している。また、現在5つめの事業としてエンパワメント事業への取り組みを計画中である。

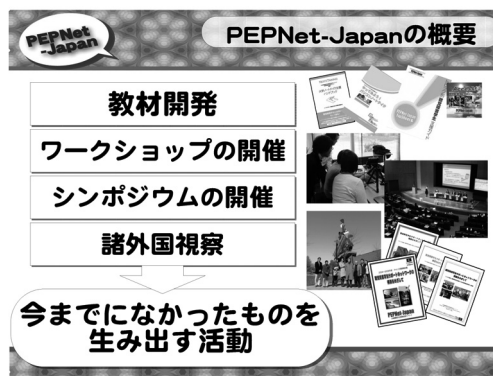


図1 PEPNet-Japan の活動  
(当日使用スライドより引用)

#### Q: 連携大学・機関とは？

高橋・金澤／「聴覚障害学生の受け入れや支援の実績があり、それらが大学組織として取り組まれている」という条件を満たした大学・機関で構成されており、現在は18大学・機関が加入している。

PEPNet-Japan に日々よせられる疑問の中には「聴覚障害学生を受け入れる条件が整っている大学のための組織なのではないか」との誤解もあるが、実際はそうではなく、連携大学・機関が中心となってむしろ全国の他の大学のために、さまざまな知識やノウハウを発信している組織だと考えて欲しい。連携大学・機関には現在ある程度の体制が整っているからこそ、これから支援体制を構築していこうとする大学に対して、回り道をせずに進められるように、これまでに蓄積したさまざまなノウハウを提供するなどの責務があると思うし、そういった社会的役割を担っているのが18大学・機関と言える。

#### Q: ネットワーク運営の予算はどこから出ているのか？

白澤／設立当初は日本財団から助成を受け、運営に関してもバックアップを受けていた。2007年度より、筑波技術大学が中心となって聴覚障害学生支援に関する拠点形成プロジェクトを立ち上げ、現在は文部科学省からの特別予算で運営している。この拠点形成プロジェクトでは、相談・支援・研修・研究・教材作成・ネットワーク形成の6つの事業を展開しており、この一部として PEPNet-Japan を運営している。

あまり世間には知られていないかもしれないが、拠点形成プロジェクトの中で最も大きな事業が相談事業である。筑波技術大学の相談窓口には年間300件以上の相談が寄せられており、支援体制構築への相談においては必要に応じてアドバイザーの派遣等も行っている。



## Q: 日本学生支援機構（JASSO）の障害学生支援との違いは？

白澤／日本学生支援機構（JASSO）は、奨学金の貸与事業などを行っている組織である。ここには特別支援課という課が設置されており、障害学生支援体制の向上のために、種々の取り組みを行っている。たとえば毎年実施されている障害学生支援の全国実態調査は、回収率も高く、非常に信頼性の高いデータとして重宝されている。また、教職員のための障害学生支援に特化した研修会も全国各地で開催しており、数多くの職員達が参加している。この特別支援課で行われる事業の1つに「障害学生修学支援ネットワーク」がある。これは全障害を対象とした相談ネットワークで、全国の大学が障害学生支援の「最初の一步」を踏み出せるように整備されている国のインフラのようなものと考えると理解しやすい。

これに対して PEPNet-Japan は聴覚障害学生支援に特化したネットワークである。そのため聴覚障害学生のニーズにとことん寄り添い、きめ細やかなサポートを提供できるよう取り組んでいる、いわば聴覚障害学生支援の専門家集団ともいえるネットワークである。

## Q: 教職員のための活動が中心ですか？

吉川／PEPNet-Japan では教職員に対するサポートを中心に行っているが、それは何も学生を視野に入れていないわけではなく、逆にこれが学生支援に直結すると考えているから。自分の体験上、学生の立場で支援を求め続けることは、非常に苦しいし、限界があると思っている。こんな時に、誰かが大学をあと押ししてくれたら、と強く願っていたが、そうした思いに応えるのがまさに PEPNet-Japan の存在なのだと思う。だから支援体制の向上にむけて、教職員へのサポートを行うことは決して遠回りではなく、むしろそれが近道であり、それこそが聴覚障害学生の環境改善に直結する道だと思う。また、PEPNet-Japan のメーリングリストには教員・職員・学生・保護者など誰でも参加ができるし、ホームページからは各種教材のダウンロードも行えるので、学生のみなさんも活用できる側面はたくさんあると思う。

## 聴覚障害学生支援について

### Q: 聴覚障害学生が主体的に動いてくれない。

吉川／支援を受けることに消極的というのは自然なことだと思う。聴覚障害学生にとって支援を受けるということは、自分の生き方までも変えなくてはいけないこと。高校までは「自分の力で頑張きなさい」という学習方法だったが、大学入学後は人の力を借りて支援を受けるようになる。別の見方をすると、情報保障を付けて新しい世界があることを知るのと同時に、今までの生き方は一体何だったのだろうかという疑問を突きつけられかねないほどの重みがある。情報保障によって情



報が得られるというプラス面と、他者の力を借りなければならないというマイナス面の2つの中で聴覚障害学生が揺らいでしまう。その揺らぎをサポートすることが、コーディネーターの専門性に求められることだと思っている。

主体性を引き出すためのスイッチを入れる具体的な方法として、一つはいろいろな情報保障手段を使ってみるよう勧めてみるのが挙げられる。今までノートテイクを受けていた学生に、支援者からも手話通訳を使うことを提案してみる。一步踏み込んで新しい世界に繋げることが、聴覚障害学生の主体性に繋がっていくと思う。

もう1つは、聞こえない仲間や先輩とのネットワークを、在学中に作ることが挙げられる。このネットワークを持つことが、社会生活の中でいろいろな壁にぶつかった時のセーフティネットにも繋がると思う。

#### Q: コーディネーターにはどんな専門性が必要ですか？

白澤／1つは聴覚障害学生の主体性をいかに引き出し、いかに寄り添えるか。それに加えて支援学生同士の繋がりを作り、学内に支援コミュニティを育てていく力が必要とされる。さらに聴覚障害学生・支援学生だけではなく、大学の教職員も巻き込んで体制強化をはかることも重要で、そこにはマネジメントが必要になるなど、非常に高い専門性が求められている。現在我が国では、3年、4年と支援に関わってきたコーディネーターが任期切れを理由にこの世界から去らざるをえない現状が続いている。こうした状況は、障害学生支援の発展にとっても、彼／彼女らを雇用する大学にとっても損失以外のなにものでもない。したがって今後大学側もコーディネーターの身分保障について真剣に向き合っていかなければいけないのではないかと考えている。

最後に、回答者より聴覚障害学生支援の将来展望と、その中で果たすべき PEPNet-Japan の役割について、お考えをお聞かせ頂いた。

高橋／PEPNet-Japan の活動はまだ6年に過ぎない。この支援の輪をもっと広げていかなければならないが、その中で支援学生・教職員を含めた大学組織・聴覚障害学生の3者のバランスについても考えていく必要があると思う。

金澤／聞こえない学生が大学で学ぶことが当たり前、支援を自分で求めることなく、そこに支援があって当たり前というのが、将来的に目指す姿だと思う。大学の通常業務の中で障害学生支援ができていて、PEPNet-Japan の役割も終わることが理想。だが、その時には別の課題も出てきていると思うので、その都度 PEPNet-Japan の役割も生まれることになると思う。そう考えると、まだまだ PEPNet-Japan の役割は終わることはないのだろうと思う。

吉川／今まで PEPNet-Japan の諸外国視察に数回参加したが、アメリカでは聞こえない大



学長がいることを知り、驚くと同時に感動を覚えた。「情報保障がきちんと受けられることで、聴覚障害者はこんなにも自由に生きることができるんだな」と痛感すると共に、自分の中の聴覚障害者に対するイメージもがらりと変わった体験だった。この時の体験から、日本でも支援体制を広めていきたいという思いを抱くようになり、それが現職の原動力へと繋がっている。今後はシンポジウムに参加する仲間の中の4分の1でもいいので、聴覚障害を持つ教職員が参加する日がきてほしい。そうなれば、聴覚障害学生支援も大きく変わっていくと思う。また、アメリカでは手話通訳養成課程を持つ大学が聴覚障害学生支援の中心となって PEPNet を組織しているように、今後は日本の大学の中にも、手話通訳養成課程が整備されればと願っている。

白澤／ノートテイクによる支援が広がりを見せてきたことで、聴覚障害学生への支援体制構築は完成に近いという意見を聞くことがある。でも理系の支援・語学への対応・医薬分野の支援など、まだまだノートテイクだけでは解決ができない場面も多く存在している。大学というのは、高校までの教えられる学習の場とは違い、自ら新しい英知を生み出す人材を育てる場である。そう考えると、現在の支援方法では聴覚障害学生がこうした英知の創造に本当に参加できるとは言い難い状況にある。今後、もっと多くの聴覚障害学生が大学院などの高度専門分野に進学し、自らの手で研究成果を生み出すとともに、聴覚障害のある教職員として、日本の知識の先端を引っ張っていきけるような、そんな社会を作っていくのが PEPNet-Japan の役割だと思っている。

また、以下に当日回答できなかった質問の一部について回答を載せたい。

**Q：支援学生の質料の確保について工夫している点・課題について。**

A：サポートの質料の確保のためには、学内外双方での人材発掘や養成が欠かせないと思う。学内では継続的に支援学生の養成を繰り返し、モチベーションを維持できるような取り組みを重ねていくこと。そして、学外では地域通訳者のネットワークに乗ること、あるいはネットワークを持つ方とのコネクションを築くことが不可欠になる。

①様々な人材を活用すること

②多用な手段の情報保障を聴覚障害学生に提供していくこと

この2点が、支援の柔軟性＝支援の質に繋がっていくと考えている。

(吉川あゆみ氏)



Q：各大学の障害学生支援で一番力を入れていることは何か？

A：学生の主体性を尊重し、学生の良さを発揮できるように関わること。しょうがい学生支援は、しょうがいのある学生のための「支援」制度ではないと実感している。我々職員の側が助けられることばかりだし、学生支援から始まった取り組みが一般学生、教職員へといい形で影響を与えていることが多くある。しょうがいのある学生と共に歩んでいくことができる大学であり続ける為に、上記のことに一番力を入れています。

（及川麻衣子氏）

Q：聴覚障害学生支援と他障害の支援では、支援方法の違いからか距離が生じているように感じている。PEPNet-Japan の組織として、他障害との関わりがあれば教えて欲しい。

A：PEPNet-Japan は、聴覚障害学生への支援を中心的な課題としているが、その手法やコーディネーターとして必要な知識、スキルについては他障害と共通する部分も多いと思っている。そのため、全障害に共通する支援ノウハウと、聴覚障害に特化した支援技術の部分を扱うのが PEPNet-Japan の範囲。これに対して他障害でも、それぞれ特化した技術が存在し、これについては、個々の専門家集団にてバックアップすべき問題だと捉えている。

（白澤麻弓氏）

Q：小規模大学での聴覚障害学生支援は、学生ノートテイクの確保が困難であったり、教員も少なく、支援体制構築が難しい状況が多い。福祉系の学科があると体制も作りやすいのか？

A：小規模大学の方が、むしろ規模が小さい分、全体の合意形成がしやすい面もあり、短時間で支援体制構築が実現できているケースも見られる。また、福祉系の学科があることも良し悪しで、聴覚障害に詳しくない福祉系の教員が情報保障の必要性を理解していないために、支援が進まない大学の悩みも聞くことがある。

全体あるいは理事会に向けた合意形成のためには、他大学の支援状況の実例と、私学助成金が活用できること、学校教育法施行規則の改正により、大学評価に障害学生支援も求められるようになったこと等をあげておくことが必要となる。

そして、実際の支援にあたっては教員向けには研修会の実施、授業担当教員への配慮願いの文書の配布。学生向けには学生テイカーの募集が必要となる。大きな大学の場合、テイカー募集がポスター掲示程度にとどまってしまう、テイカーの確保が大きな課題になるが、小規模大学の場合は、皆が集まる機会を利用して直接呼びかけることが可能になるため、むしろテイカーの確保はしやすい面もあるのでは。

（金澤貴之氏）



## 【特別対談】

### 「宮城教育大学学長と語る－大学教育と障害学生支援－」

報告者：筑波技術大学 磯田恭子・白澤麻弓

## 企画趣旨

本シンポジウムの共催校である国立大学法人宮城教育大学では、「特別支援教育マインドを持った学生を育てる」というポリシーを掲げ、学長のリーダーシップのもとに、積極的に障害学生支援に取り組んでいる。

本企画では、宮城教育大学での障害学生支援体制構築にご尽力されてきた高橋孝助学長並びに藤島省太教授をゲストとしてお迎えし、大学としての障害学生支援ポリシーや、学生教育の中の障害学生支援の位置づけ、教員養成大学で障害学生支援に取り組む意義などについてお話を伺った。司会は国立大学法人東京大学 先端科学技術研究センターの中野聡子先生によって進められた。



## 背景

高橋学長は中国近現代史がご専門でありながら、全学的な障害学生支援体制構築のリーダーシップをとっておられる。以前ご自身の研究室に障害のある学生が在籍された経験もお持ちで、当時学生同士が自然と助け合いながらキャンパスライフを送っている様子を目にされていたとのことである。学長就任後も、こうした体験は十分に生かされていて、「このようなサポートは全学的に認知され、学内の基盤システムとして行うべきことだ」という信念のもと学内の方針を纏めていかれた。しかも、教員養成大学ということもあり、単に個別の障害学生支援にとどまることなく、卒業後を見据えて全学生に障害に対する基本的姿勢を身につけさせておく必要があると考えていることが、宮城教育大学の特長といえる。そのため在学中のカリキュラムの中でも、特別支援教育に関わる科目を必須科目として設置し、全員が障害に関する基本知識を身につけてから卒業する体制がとられている。また障害学生自身も同じカリキュラムを受講することで、支援を受けることの意味を考えながら主体的に勉強している様子が感じられるとのことであった。

藤島教授は、現在の全学的な支援体制構築の動きの中心で活動してこられた先生である。元々、宮城教育大学には学生達が努力して作り上げてきた支援制度があり、それを大学が引き継ぐ形で全学的体制を構築されてきた。支援室立ち上げの時期には、大学への説明材料として「1年間のノートテイクで必要な紙の枚数や使用するボールペンのインクがなくなるペース」など、細部にわたる数字をデータとして提示し、予算の根拠とするなど、事務との交渉の方法を一つひとつ意識的に指導されていたとのことである。

## 内容

対談はこうしたお二人に対して、中野氏から「全学的な支援体制の前後で、学内の意識がどのように変わったのでしょうか？」などの質問を投げかける形で進められた。以下、対談の一部を紹介する。

宮城教育大学では、教員が個別に対応するのではなく、障害学生支援は大学が果たすべき役割であることを意識させるためにも、形に残るよう学生に要望を出させてきた。教育的な意味で聴覚障害学生を伸ばしていくことができたのは、全学的な障害学生支援体制を視野に入れてきたからであると言える。また、トップダウンで決めていくのではなく、教職員・学生などがそれぞれの立場で障害学生支援について考え、全学的な体制を作っていくことが重要だったと言える。

学内の教職員間で支援に対する温度差については、教員養成大学であることで意識の高い教職員が多いためか、障害の有無で学生への対応を変えることはなく、学生同士も専攻の垣根もなく対等に接している。

障害学生支援にかかる予算が問題となる大学も多いが、一般の学生に対しても教育的な意味からプラスになる面が大きいことの共通理解を得ることが、全学的な支援体制構築に繋がっていく一つのポイントになるのだろう。

また、聴覚障害学生のエンパワメントに関して、両氏のお考えをうかがった。

障害学生支援を行う大学が増えてきたことで、聴覚障害学生が大学に入学する時にはすでに支援体制が構築されているという大学も増えている。これは大変喜ばしいことだが、反面学生は支援に対して受け身になり、学生自身が成長する機会を失ってしまうという危険性もある。しかし、宮城教育大学では、障害のある学生がいることについて、我々がその学生のためだけに教育しているという意識はない。当該学生を中心として、周りの学生に与える教育の効果、周囲の教員の意識レベルなど、全体が高まることによって相乗効果的に学生のエンパワメントに繋がっていけばいいと考えている。ただ、本学には聴覚に障害のある教員が採用されている。彼のような同じ障害を共有する当事者が発言をしていくことで、学生も喚起されるというか、そうした教員がいることが、支援を受ける側の学生にもいい影響を与えていると言えるかもしれない。

聴覚障害教員の採用に当たっては、決して学内の皆が大賛成というわけではなかった。十分情報保障が出来ないのに採用してもいいのか、学生指導に何らかの支障が生じた場合に、大学としてきちんと責任が持てるのかといった議論があったことも確かである。しかし、彼にはいろいろ学内に対して問題提起してほしいという期待があった。もちろん最初からすべての情報保障は難しいので、自分でやれるところは自分でやってほしいというお願いもした。また、聴覚障害学生に対しては当事者としての発言をし、聴覚障害学生の成長に繋がる指導をお願いしたいと思った。



この後フロアからの質問としては、次のような問いが出された。

「学生支援 GP を取得したことをきっかけとして学内の支援体制構築を進めているが、期限付きの予算のため、その後の維持について課題が残るはずである。予算獲得のタイミングと支援室設置のタイミング、そして予算が終了した後の見通しや戦略についてぜひ教えていただきたい」



これに対し、高橋学長からは「学生支援 GP を獲得したことで基本の装備を整えることができた。今後機材が新しくなる度に更新も必要となるが、これらについては学内の予算からどうにかしてでも捻出していくつもりである。宮城教育大学としては今の規模を縮小するつもりはないし、むしろ体制を立て直してでも続けていくべきことであると思っている。またこの程度の全学合意はできるはずと考えている」との回答がなされ、会場からは思わず拍手がもれる場面もあった。さらに、「国立大学の責務として特別支援教育からは手を退いてはいけない、なので断固としてこうした援助は続けていかなければいけない」という高橋学長の思いも語られ、会場の共感を得ていた。

最後に今後の展望として、以下のことが語られていた。

まず高橋学長からは、「障害のある先生が教員としてそここの学校の教壇に立つ。そういう時代を来させなければならない。そうなれば日本は先進国の中の先進国と言ってもいいと思う。我々はぜひそんな時代がくることを目指して頑張らなければいけない」と大きな展望が語られた。

藤島教授からは「20 年前に宮城教育大学に赴任した時には、ろう教育の中で手話がほとんど認められていなかった。その頃『これから教師になる人は手話ぐらいできないと』という思いを持っていた。今や聴覚に障害のある人が高等教育を受けられる時代になったが、高等教育場面での手話通訳には、専門用語や教員が使う用語の奥深さに対応ができる通訳者の養成など、課題はまだ多く残っている。こうした問題をクリアして、今後は障害のある人たちが普通に高等教育を受けられる時代になってくれれば」との話を頂いた。

これらを受け、中野氏からは「障害学生がいるから仕方なく予算を付けて支援をしてあげようということではなく、支援をすることが聴覚障害学生ひいては一般の学生を成長させることに繋がっているし、その中に障害のある大学教員の存在がある、ということを知ることができた。今後も宮城教育大学には、先駆的な全学的支援の取り組みに期待したい」と総括がなされた。

## まとめ

今回の対談では、全学的な支援体制を構築するために学生支援 GP という期限付きの予算を獲得し、地盤を固めた宮城教育大学の支援体制構築の理念と現在に至るまでの経緯につ

いてお話を伺うことができた。この中では、従来学生の力により進められてきた聴覚障害学生支援を、大学の責務として行なうにあたり、高橋学長のリーダーシップがいかに発揮されたのか、それにより現場の教職員はどのように喚起され、学生をも巻き込んだ全学的体制に纏めていったのかを知ることができた。特に印象的だったのは、「入学した学生に対しては平等に教育を受ける権利があり、それを大学が保障しなければならない。また、卒業した学生が特別支援教育に携わるようになった時にも、きちんとした知識を持った教育ができるようにする必要がある」といった、高橋学長の学生一人一人の将来を思い、また全国にそうした思いを持った教員を配置したいというビジョンの基に、支援体制が組み込まれていることであり、またその目的のもと、障害のある大学教員を採用していることであった。

また、現場で学生指導にあたる藤島教授も、学生の成長を促すために教員が体制作りに奔走するだけでなく、学生自身が公になる形で大学に要求を上げていくことの重要性、その積み重ねが事務職員の意識を高め、大学全体を動かすきっかけになったことが話された。ともすれば学生には「こんなに困っているのにすぐに動いてくれないなんて、理解がなく非協力的な先生だ」と思われるかも知れないが、これも学生の成長の期間として捉え、見守りながらも必要なアドバイスを続けていく教員の戦略的な方策であることも知ることができた。

これらが教員養成単科大学だからできたことではなく、先駆事例として全国の大学にも波及していったならば、聴覚障害学生の学ぶ環境も大きく変わっていくことだろう。以前高橋学長より「ユニバーサルデザインの校舎があり、障害のある教員があちこちの教壇に立っていて、当たり前の手話ぐらいできる教員がいるようになったら、学校現場は変わってくると思う」というお話を伺うことができた。今回のお話をうけて、それを具体化できる日もそう遠くはないのではとの思いを持つことが出来た。

今回は1時間という短い時間であったが、参加した学生・教職員すべての人が将来を期待できる内容であったのではないだろうか。

企画にご協力いただいた高橋孝助学長、藤島省太教授に改めて感謝を述べたい。また、中野聡子氏には非常にスムーズかつ的確な進行をして頂き、深謝の意を表したい。

\*宮城教育大学しょうがい学生支援室設立までの流れは、分科会2の報告(p13~17)を参照されたい。



## 【ランチセッション】

### 「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2010」

全国の大学が日頃実践している支援の取り組みをポスター形式で発表し、情報交換を行うとともに創意工夫やアイディアの斬新さを表彰するコンテスト企画も、今年で3回目の開催となった。参加者にはあらかじめ投票用紙を配布し、「ぜひ参考にしたい」という内容について投票して頂き、多くの票を集めた団体には閉会式にて表彰がなされた。なお、表彰のプレゼンターは、前日に開催された「平成 22 年度障害学生支援大学長連絡会議」にも参加されていた9大学の学長・副学長の先生方をお願いした。以下に表彰された団体を紹介するとともに、当日発表されたポスターを掲載する。



「PEPNet-Japan 賞」には、群馬大学が発表した聴覚障害学生のエンパワメントに関する発表が選ばれた。同大学からは今回3名の発表者が参加しており、「聴覚障害学生を中心に設立した情報保障サークル」「デジタルペンを使用した情報保障」「手話を通じた活動の広がり」について発表がなされた。自分たちの活動に自信を持ち、積極的に参加者へのPRを行っていたことで、多くの関心を集めたものと思われる。

「準 PEPNet-Japan 賞」は、同志社大学が選ばれた。同志社大学からは、障がい学生支援制度の中で行われている challenged キャンプ、並びに学際科目「心のバリアフリーをめざして」の紹介がなされた。

「Good プレゼンテーション賞」は、宮城教育大学しょうがい学生支援室・聴覚しょうがい部会の学生運営スタッフの発表が選ばれた。学生を中心に行っている日々の活動についての紹介がなされた。

「アイディア賞」は FKCfriends に贈られた。FKCfriends とは、福岡大学・福岡教育大学・筑紫女学園大学の3大学で聴覚障害学生と情報保障をサポートする学生で作られた団体で、日頃の活動内容と今後の課題について発表がなされた。

「PR・啓発グッズ部門賞」はフェリス女学院大学バリアフリー推進室が受賞した。展示されたパンフレットやクッション、Tシャツなどのグッズには多くの関心が寄せられていた。

なお、上記以外の団体には「奨励賞」が授与された。全てのポスターは PEPNet-Japan ホームページに掲載しているのでご覧頂きたい。本企画は各大学の取り組みの発表の場だけに限らず、参加者同士の情報交換の場として、今後も継続していきたいと考えている。

<参加団体>

○パネル発表部門

FKCfriends

愛媛大学バリアフリー推進室

愛知教育大学

京都精華大学障がい学生支援室

同志社大学学生支援センター障がい学生支援室

日本社会事業大学障がい学生支援組織 CSSO

千葉大学ノートテイク会

日本工業大学

筑波大学障害学生支援室聴覚障害学生支援チーム

群馬大学

宮城教育大学しょうがい学生支援室聴覚しょうがい部会学生運営スタッフ

東北福祉大学障がい学生サポートチームテイク☆テイク

岩手大学人文社会科学部人間科学課程

遠山正朗・小林充明・照木篤子

○PR・啓発グッズ部門賞

京都精華大学障がい学生支援室

同志社大学学生支援センター障がい学生支援室

宮城教育大学しょうがい学生支援室

東北福祉大学障がい学生サポートチームテイク☆テイク

フェリス女学院大学バリアフリー推進室

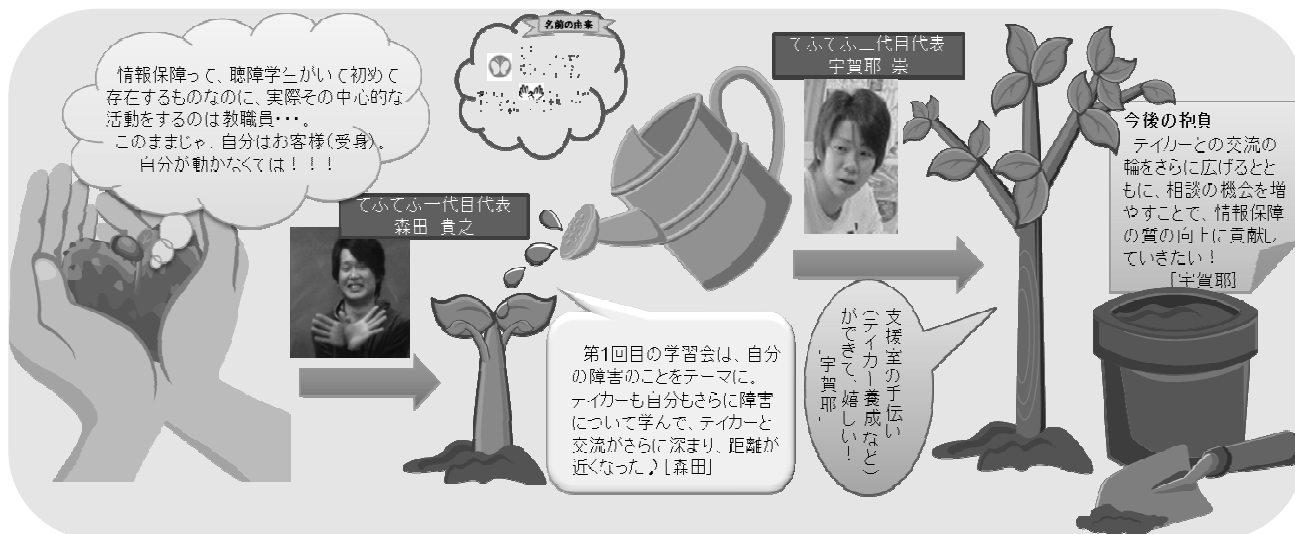
※順不同、敬称略



群馬大学 :

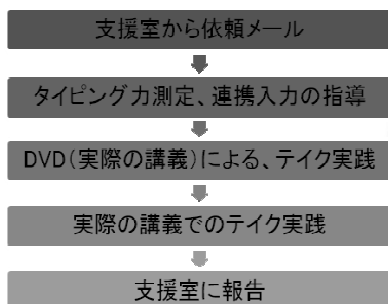
自分が動けば、周囲も変わる！

～情報保障サークル「てふてふ」～



## 支援室と連携

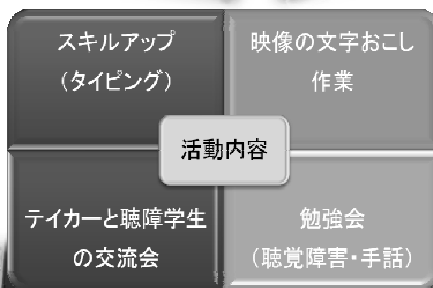
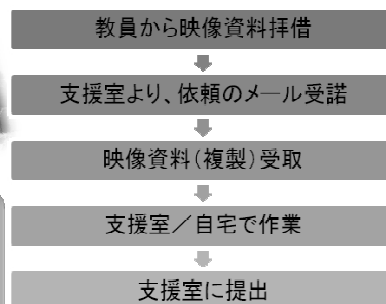
～テイク講習会～



大学生生活をもっと！  
そして、よりよく！！！！

## 支援室と連携

～文字おこし～

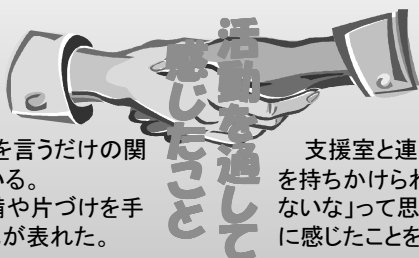


実際、とても助かってます♡  
支援室職員一同



## 連帯

以前、学生ティカーとは挨拶とお礼を言うだけの関係だったが、今は楽しく交流ができている。それだけでなく、積極的にテイクの準備や片づけを手伝うようになり、自分の気持ちにも変化が表れた。



## 共有

支援室と連携を持つことで、教職員に気軽に相談を持ちかけられるようになった。今までは「これは言えないな」って思うことも少なからずあったが、今は率直に感じたことを伝えている。

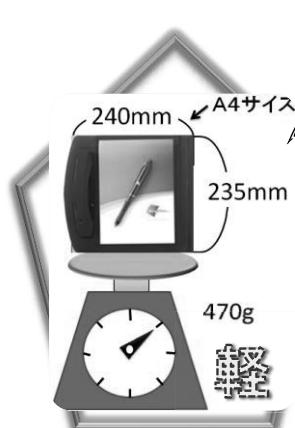
### 問い合わせ先

群馬大学社会情報学部情報社会科学科  
群馬大学教育学部  
群馬大学障害学生支援室

宇賀耶 崇  
金澤 貴之

(tefufu\_gis@yahoo.co.jp)  
(kanazawa@edu.gunma-u.ac.jp)  
(a\_dis-support@ml.gunma-u.ac.jp)

# 群馬大学：自分に合わせて情報保障を使いこなす～デジタルペン～



## デジタルペンとは

### 簡 速 安

- 手書き感覚で書ける
- 使うのはレポート用紙と専用のペンのみ
- 数式や図も手書きだから簡単に書ける
- パソコンとデジタルペンをケーブルでつなぐだけで完了
- 書いたものがパソコンにリアルタイムに表示
- 25,000円とパソコンより比較的安い

### ○データ

- 「紙」と「電子データ」の両方で保存可能

### ○修正

- PCに表示されたデータはデジタルペンで修正可能

### 手書き



### パソコン



## ゼミで活用しています！

質疑応答や、教員からの説明時に利用します（図1）

### 手書きのメリット

数式や図、文字をそのままの形で理解できる

### 周囲にも好評

他の参加者にもわかりやすい

### とりのこされない

発表者自身が書くので全体の進行についていける



デジタルペン1台を発言者で相互に回して利用します  
(専用のティカーはつけない形)



図1：デジタルペンを用いたゼミでの情報保障



### ティカーの声

英語の授業でデジタルペンを使ってティークをしています。デジタルペンで書いたものはパソコン上に表示されるため、ティカーが利用学生を挟んで座る必要がありません。またデジタルペンは3色あるため、重要なことや後から書き足すことがある際に、色を使い分けることができ、便利です。

語学の授業にも有効です！



大きく 自分の  
世界が  
広がった！

## 自分の変化

さまざまなスタイルで  
講義へ参加する

- デジタルペン
- パソコンティク

自分のニーズに気づく

- 使用方法の試行錯誤
- 周囲の人にも利益があると実感

自分を受け入れる

- 周囲に頼れるように
- 負い目を感じなくなった

問い合わせ先

群馬大学工学研究科博士前期課程応用化学・生物化学専攻  
群馬大学教育学部障害児教育講座  
群馬大学障害学生支援室

渡邊紘基

金澤貴之 (kanazawa@gunma-u.ac.jp)

(a\_dis-support@ml.gunma-u.ac.jp)

# 群馬大学：自分らしく生きる ～手話がもたらす世界～

手話がもたらす世界 ～同級生とのコミュニケーションから学んだこと～

## 4月から7月までのMYストーリー

4月	障害児教育専攻の仲間に説明
5月	1ヶ月半で手話にフル移動
6月	教育学部全体に自分の障害について説明
7月	キャンパス実習



タイの聾学校の子どもたちと



大学生生活って  
楽しい！

### 周囲

- ・支援室の講義（手話やろう文化）
- ・専門教員から障害児教育専攻全員に筆談メモ配布
- ・講義「障害者文化と共生社会」（情報保障を学ぶ）
- ・会議での先輩による手話通訳
- ・（自閉症ふれあいサークル「たんぽぽ」）

### 自分

- ・障害の説明
- ・【障害の程度、接し方、注意（例：肩たたき）】
- ・教養教育の授業のコーナーとして「あやののワンポイント手話」を実施
- ・毎回10分間手話を教える→教育学部のみならず、医学部、社会情報学部の学生もいたため、障害児教育専攻の友達が通訳
- ・躊躇なく手話を活用

### クラスメイト

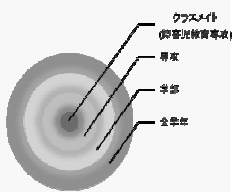
- ・手話サークル「でんでん」で地域のろう者と話す
- ・障害に関するビデオや本を支援室から借りる
- ・手話を積極的に質問して勉強
- ・手話の本を自ら購入
- ・手話した（歌詞を手話にしてみる）
- ・とっさの通訳に対応
- ・ろう学校のボランティアへの参加意欲を率ず
- ・パソコンタイピング登録
- ・手話技能検定を受ける

## 山本綾乃、どんなひと？

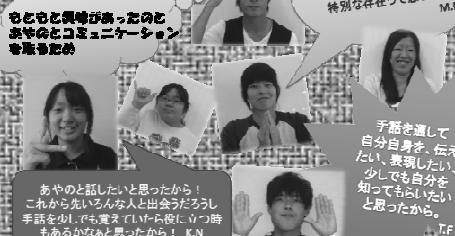
小学校：地元の小学校にインテグレーション  
中学校：母の勧めでろう学校へ  
聞こえない友達と出会い、手話を獲得していく。  
高校：進学先はろう学校を選択  
高2の夏、タイのろう学校に行ったことで  
自分に誇りを持つようになる。  
現在：聞こえない子どもの教育に関わる仕事がしたく、群馬大学にて勉強中。



### どんどん広がる理解の輪



## クラスメイトの熱いVOICE



### 積極的に

自分に必要なものは最初からアピール！  
ためらわずに手話を使おう  
初めのうちに障害者の存在、特徴、必要なことなどを周囲に広げていこう

感じたこと

### 感謝の心を

ありがとう  
同級生 先輩方 支援室の職員  
理解のある教職員  
群大のこれまでの支援の歴史

### 問い合わせ先

群馬大学教育学部障害児教育専攻 山本綾乃  
群馬大学教育学部 金澤貴之  
群馬大学障害学生支援室

(rd270149-3235@tbz.t-com.ne.jp)  
(kanazawa@edu.gunma-u.ac.jp)  
(a\_dis-support@ml.gunma-u.ac.jp)

# 講義「心のバリアフリーをめざして」

概要 (2010.08.31~09.04 受講者41名)

- ・ 1日3コマ5日間の夏季集中講義 (2単位)
- ・ 大学コンソーシアム京都の単位互換制度により、他大学に開放 (立命館大学、京都女子大学、京都薬科大学など)

ともに  
学ぶ

知る  
meet



多彩なゲスト  
スピーカー

大学教授の他、実際に福祉の現場で働いている方や障害とともに生きている方など9人の教授陣を迎えた。

チャレンジド  
キャンプとの  
連動

正課の授業と課外活動が連動し、心のバリアフリー参加者に対して、キャンプ参加を呼びかけた。心のバリアフリーの講義を通じて体系的に学んだ上でキャンプに参加したことにより、より深い洞察を得ることができた。

学内で  
障害体験

2日目には同志社大学新町キャンパスにて、車イス・アイマスク・盲ろう体験を行ない、サポートするだけでなく、受ける側の気持ちに出会い理解を深めた。

出会う  
face

向き合う  
experience

つながる  
share

豊富な  
ディスカッション

講義スタイルだけでなく、連日ディスカッションを実施。お互いの気づき・思い・発見を言葉に出すことで刺激し合った。

越える  
realize



体系的に学ぶ  
知らなかった世界に触れる

【お問合せ先】同志社大学 学生支援センター 障がい学生支援室  
E-mail:jt-care@mail.doshisha.ac.jp

# Challengedキャンプin能登千里浜

ともに  
考える

概要 (2010.09.09~09.11 参加者26名)

- ・ 2泊3日のキャンプ@能登千里浜休暇村
- ・ 障害体験をし「気付き」を仲間と共有することで、理解を深める。そして、それぞれが心のバリアと向き合い、心身ともに成長することを目的としている。

## 学生スタッフ の導入

今回、4名の学生スタッフを導入。スムーズな運営が可能となった。また、学生同士ならではの意見交換を活発にし、キャンプ全体を盛り上げただけでなくスタッフ自身の成長も見られた。



釣れる  
かな？

知る

わかる



変わる  
変える



何色  
だろう？

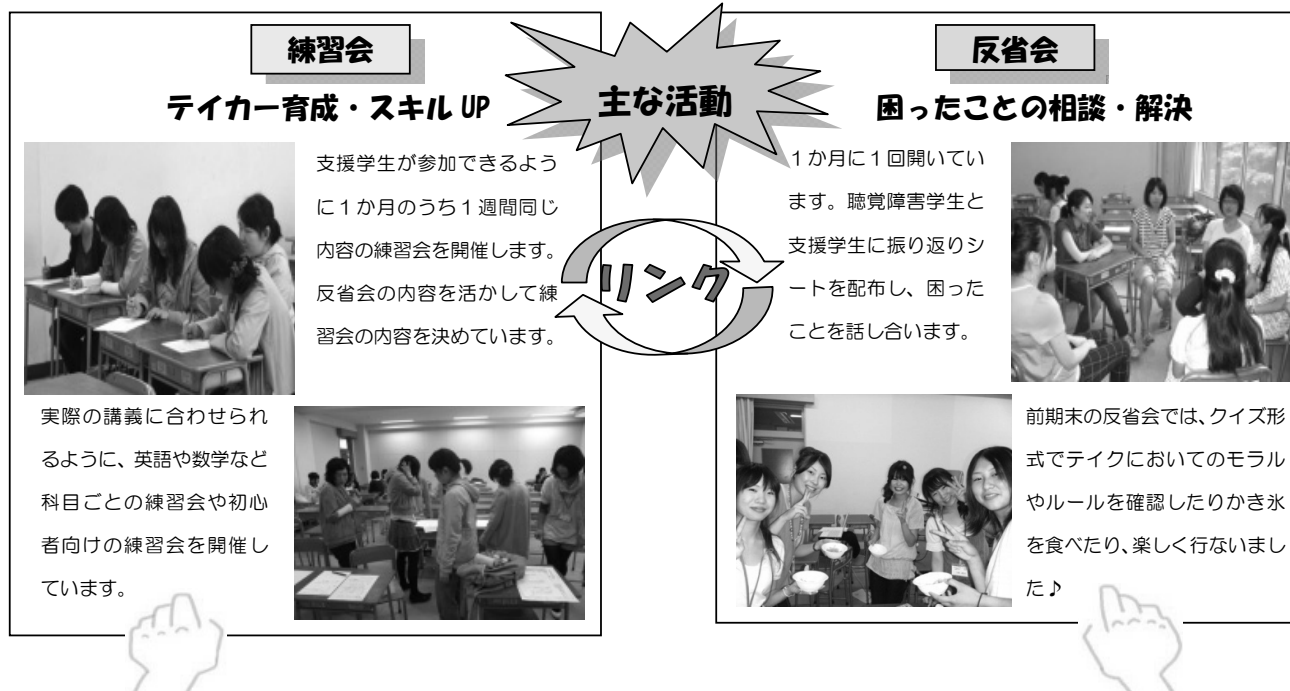
集合！




新しい仲間との  
出会い...  
カッコイイ人になろう！

# 宮城教育大学 しょうがい学生支援室 聴覚しょうがい部会 学生運営スタッフ

宮城教育大学しょうがい学生支援室・聴覚しょうがい部会の学生運営スタッフは、総務・養成・反省会・広報・事務で構成されています。総務は運営スタッフのまとめ役・学生とコーディネーターのパイプ役、養成は練習会の内容を企画・実施、反省会は反省会の内容を企画・実施、広報は練習会等の写真撮影・ポスター作成、事務はペン・紙の補充をしています。




**情報保障を支える信頼関係**



「誰とテイクするの?」「どんな人がティーカーなの?」という不安な状態を少しでもなくしたいと思い、親睦会をひらいています!先生・コーディネーター・聴覚障害学生・支援学生がお酒を飲みつつ、テイクの話や大学生活のことなどいろんな話をしながら交流を深めています。宮城教育大学ではこうやって信頼関係を少しずつ築いています♪

**親睦会**





私たちが学生運営スタッフです (\*^\_^\*)

学生運営スタッフは、月に1回程度集まり、活動内容について話し合いをしています。また、上記の活動以外にもノートテイクの勧誘や説明会を行なっています。

問い合わせ先

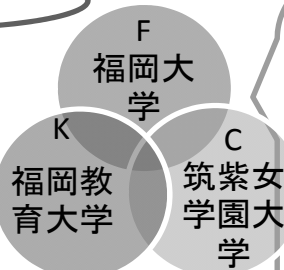
宮城教育大学 しょうがい学生支援室 聴覚しょうがい部会 学生運営スタッフ

TEL・FAX : 022-214-3651 E-mail : Support-Coordinator@ml.miyakyo-u.ac.jp



# FKCfriends

2010年合宿



筑紫女学園主体の勉強会に福岡教育大学と福岡大学が参加したことがきっかけで、情報保障に関わる活動を始めようとなり、3大学の聴覚障害学生と情報保障をサポートする学生で作られた団体(2009年3月結成)  
聴覚障害学生・・・6名  
健常学生・・・47名  
(2010年現在)

基礎

•FKCの基盤を作る

人数

•各大学のテイクの人数を増やす

九州

•九州全体の大学に情報保障を広め、理解してもらえるようにする

これからの課題

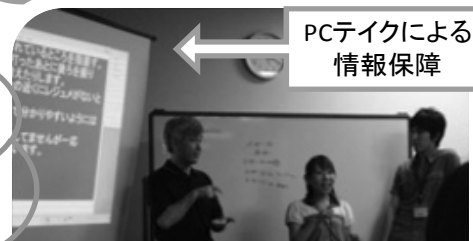
- ◆スキルアップ
- ◆他大学への呼びかけ

活動内容

- ・合宿  
情報保障の意見交換会、字幕や文字起こし対策について、聴覚障害学生とテイクのそれぞれの声、交流会など
- ・研修会  
各大学の活動報告、聴覚障害やテイクについての勉強、ノートテイク養成講座の体験、交流会など

2010年9月の合宿

新たにFKCfriendsに加入したメンバーも参加し、字幕・文字起こし対策について話し合ったり、テイクー同士や聴覚障がい学生同士でのディスカッション、今後の活動予定を決めたり...とプログラムは盛り沢山!!!合宿を通してみんなも仲良しに★



PCテイクによる  
情報保障



字幕・文字起こし対策について話し合い中

## 今までの活動の成果

各大学において、学内の先生や学生の理解が深まり、テイクをしやすい環境になった

福岡大学:学内へのノートテイク活動の呼びかけの場が盛んになった  
福岡教育大学:支援室が出来、器具が増えた  
筑紫女学園大学:学生課に懸けあってテイクーに対する謝金を上げるようになった

問い合わせ先

福岡大学 小林 久晃 sm081001@cis.fukuoka-u.ac.jp  
福岡教育大学 岩崎 礼佳 s214104@fukuoka-edu.ac.jp  
筑紫女学園大学 新留 和恵 up0815168@chikushi-u.ac.jp  
太田 富雄 tomiohta@fukuoka-edu.ac.jp



## 【ランチセッション】

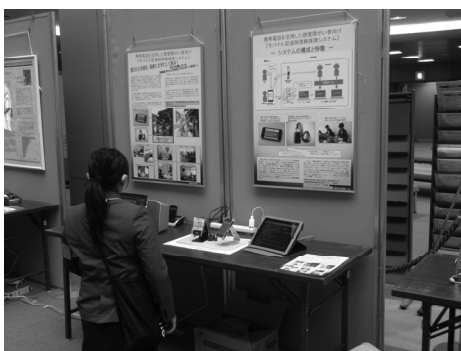
「聴覚障害学生支援に関する機器展示」及び「東北地区における聴覚障害学生支援の活動紹介」

ランチセッションでは次ページで報告する「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2010」の他、「聴覚障害学生支援に関する機器展示」及び「東北地区における聴覚障害学生支援の活動紹介」、「PEPNet-Japan 連携大学機関の活動紹介」も併せて開催された。

特に「聴覚障害学生支援に関する機器展示」及び「東北地区における聴覚障害学生支援の活動紹介」について、以下に展示内容を紹介する。

### ＜聴覚障害学生支援に関する機器展示＞

- ・ FM 補聴システム
- ・携帯電話を活用した「モバイル型遠隔情報保障システム」
- ・ 日本遠隔コミュニケーション支援協会（NCK）



### ＜東北地区における聴覚障害学生支援の活動紹介＞

- ・ 秋田県立大学
- ・ 東北福祉大学
- ・ 東北学院大学
- ・ 尚絅学院大学
- ・ 仙台大学
- ・ 岩手県立大学
- ・ 東北公益文科大学



## 第6回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム 実行委員

大会長	高橋孝助	宮城教育大学 学長
実行委員長	及川 力	筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター長
実行委員	藤島省太	宮城教育大学
	菅井裕行	宮城教育大学
	松崎 丈	宮城教育大学
	芳賀 茂	宮城教育大学
	村田哲彦	宮城教育大学
	前原明日香	宮城教育大学
	及川麻衣子	宮城教育大学
	武山美恵子	宮城教育大学
	横沢哲美	宮城教育大学
	高橋明美	みやぎ DSC
	田宮 悠	みやぎ DSC
	石原保志	筑波技術大学
	小林正幸	筑波技術大学
	長南浩人	筑波技術大学
	三好茂樹	筑波技術大学
	河野純大	筑波技術大学
	白澤麻弓	筑波技術大学
	中嶋靖雄	筑波技術大学
	萩原彩子	筑波技術大学
	磯田恭子	筑波技術大学
	蓮池通子	筑波技術大学
	中島亜紀子	筑波技術大学
	石野麻衣子	筑波技術大学

## 第6回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム 報告書

発行：日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）事務局  
〒305-8520 茨城県つくば市天久保 4-3-15  
筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター

※本事業は、文部科学省特別教育研究経費による  
拠点形成プロジェクト（筑波技術大学）の活動の一部です。



